

『青谷上寺地遺跡の農耕
～農具を中心に～』を聴いて

聴講日：H29.6.3
むきばんだやよい塾第18期

青谷上寺地遺跡は奇跡的な環境条件により、木製遺物などの保存状態がよく出土数が桁違いに多いことが特徴です。木製品の加工レベルは極めて高く、この地の首長が他の地域への威信財として製作された可能性が高く、木工の専門職人が作業していたと推定されています。これらの芸術性の高い木製品の出土からこの地が交易拠点としての港湾集落であることは間違いありませんが、また別の側面も有していることを見ていきます。

1. 農耕の証拠

上寺地遺跡では、集落の中心域から勝部川沿いの上流から水田畦畔遺構が何ヶ所か検出されています。また木製桶には炭化した米の痕跡を残しているものもあります。さらには、大量に出土している木製遺物の中には農具と断定される遺物も相当数含まれていることから、この遺跡では農耕が営まれていたことは確実です。

2. 農具の種類

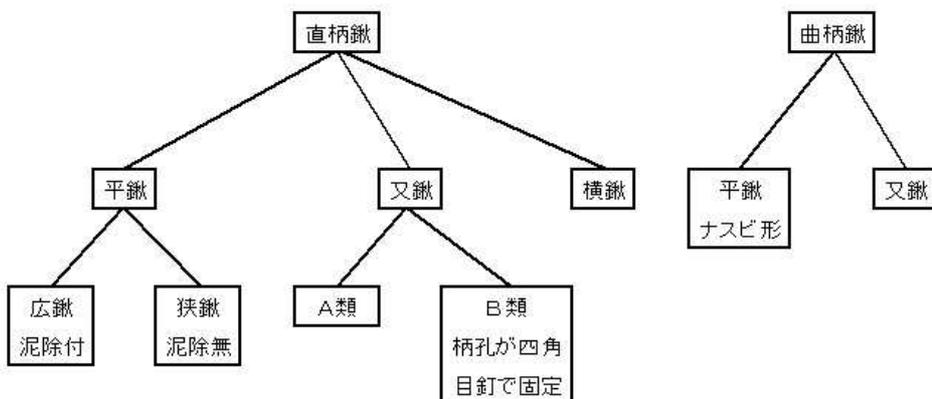
出土している農具は①整地用具、②収穫用具、③脱穀・調整用具に分類できます。

整地用具としては、鍬・鋤・田下駄などがあり、鍬(鋤)先などの鉄製品や石製の遺物もありますが、木製のものが多数を占めます。収穫用具としては、石包丁や木包丁と呼ばれる穂積具と鎌の類です。材質的には、木製、鉄製、石製のいずれも出土されていますが、整地用具同様に多いのは木製のものです。石製収穫用具の中には大型直縁刃石器と呼ばれるものがあり、その使われ方から当時の農耕方法が推察されます。脱穀・調整用具としては、木製の臼や竝杵などです。

3. 青谷上寺地遺跡の農具の特質

当時の鍬は、身と柄から構成され柄の形状から「直柄」と「曲柄」に分かれ、身の形状から「平鍬」「又鍬」「横鍬」にわかれます。平鍬はさらに「広鍬」と「狭鍬」に細分され、かつては「丸鍬」と呼ばれていた「泥除」が装着されたものもあります。この遺跡の鍬は又鍬が多く、また「直柄又鍬B類」とされる独特の形態の又鍬があります。一般的な又鍬(直柄又鍬A類)と比べると、柄を取り付ける部分が狭められ刃が放射状で、柄孔が四角形で身と柄を目釘で固定する特徴を持っています。鋤は身と柄を一つの材料から作り出す一木鋤もありますが、身と柄を別材から作って組み合わせた「組合せ鋤」が多いです。柄を取り付ける角度の違いからは「直伸鋤」と「屈折鋤」があります。田下駄には穿孔式(4孔、3孔)と挟り式があり、横長に(孔間(挟り部間)の狭い方を足幅方向として)履いたと推測しています。

鍬の分類



B類



4. 弥生時代後期における農具の変革

(1) 田下駄(特に板型快り式)の急増

弥生後期の青谷上寺地遺跡の特徴として、右のグラフに示すように、田下駄の急増が挙げられます。穿孔式より製作が容易な抉り式の急増が目立ちます。

(2) 木製穂摘具(木包丁)の急増

弥生各時期の穂摘具の出土数をまとめた表から分かることは、木包丁がⅢ期(後期)に突出して多いことです。使用者の体力や熟練度に依存しない道具が選択されているようです。

(3) 又鍬の比率増加

各期の鍬の出土数からは、後期になって又鍬が多く作られたことが分かります。

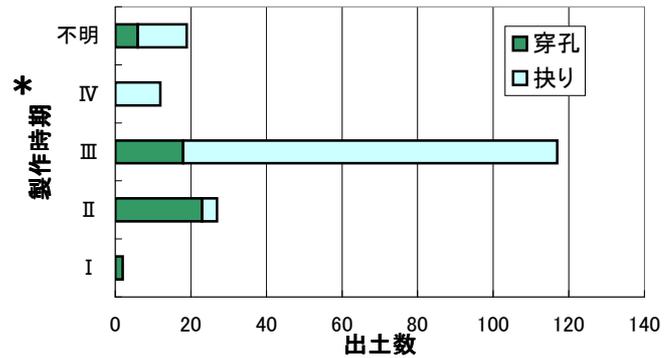
(4) 青谷上寺地型又鍬の成立

これらの又鍬には柄孔が四角で、身と柄を目釘で固定するというこの地域独特の又鍬(直柄又鍬B類)が含まれています。この独特の又鍬が成立した背景として食糧増産の必要に迫られて、耕地面積を拡大しなければならなかったと推測されます。水田の開拓が必要になった状況は、上記(1)(2)に挙げた製作容易な農具や、使用が安易な農法が選択されていることから読み取れます。

(5) 精巧な鋤柄(ヤマガワ製)の製作

この時期の農具には精巧な文様が施されたものがあります。それらは、威信財を製作していた専門の木工職人の手によるものと推測されます。直柄又鍬B類に採用された『身と柄を目釘で固定する』技法は、木製容器の製作に多用される技法だからです。彼らの高い加工技術の賜物である木工製品は首長の威信を高め、交易により最盛期を向かえますが、一方で、食糧増産、耕地拡大に伴う農具の増産に迫られました。作り易く、誰もが使える農具の数が増え、それでも足りない農具製作の現場を補うために木工の専門職人たちも投入された可能性があります。

田下駄の出土数の変遷



時期*	石包丁	木製穂摘具
I	31	0
II	49	4
III	45	61
IV	13	5
不明	29	9
計	167	79

時期*	平鍬	又鍬
I	5	0
II	12	13
III	3	29
計	20	42

* 本文掲載のグラフ及び表の各時期は以下の通り。

- I : 弥生前期後葉～中期前葉
- II : 弥生中期中葉～中期後葉
- III : 弥生後期～古墳前期初頭
- IV : 古墳前期以降